

越後での戊辰戦争 米沢藩の役割語る

新潟の記念館館長

米沢

歴史講演会
「奥羽越列藩同

盟と加茂軍議」が25日、米沢市の伝国の杜で開かれ、越後における戊辰(ぼしん)戦争が日本国家の形成に果たした役割を見直した。

河井継之助記念館(新潟県長岡市)の稲川明雄館長が講師を務めた。落城した長岡城の奪還作戦を練るため、1868(慶応4)年5月に越後加茂で行われた

加茂軍議で「米沢藩は重要な役割を果たした」と強調。すでに始まっていた戊辰戦争に米沢藩は関わっていないが、主導役となる作戦を要望され、米沢藩士・甘粕継成は義を尊ぶ上杉謙信の精神に従い「頼まれればやらねばならぬ」と引き受けた。その後、戦局は局

地戦から激戦へと転じたことを説明した。

「越後における戊辰戦争は明治維新を成功させるための踏み台だった」とも指摘。薩摩藩を批判して「豊かな国家をつくるには諸藩が助け合うべきだ」と主張した米沢藩出身の志士雲井龍雄のげき文「討薩檄(とらさつげき)」を基に戦った戊辰戦争について「歴史的に評価されていないが、見直すべきだ。そして加茂軍議は日本を正常な姿に戻す出発点だったと知ってほしい」と述べた。

加茂商工会議所(新潟県加茂市)が主催し、市民など約120人が聴講した。



稲川明雄館長(左)が越後における戊辰戦争の意味について講演した

米沢市・伝国の杜